

「大友宗麟」を完結して

御手洗 一 而

(賛助会員 埼玉県川越市小堤)

四部作「宗麟」の完結篇「王道幻想の巻」を出版した時、西日本新聞は、七年間の労作として紙上に紹介してくれた。その時は、書き上げるのに七年もかかったのかと感慨無量であったが、振り返ってみると、腰痛やら宗教問題で書けなくなったり、いろいろな事があった。この稿は、なぜ宗麟を書く気になったか、その動機から回想してみたい。

さきに藩祖毛利高政の一代記をまとめたが、この時は、秀吉子飼いの高政が、同僚達が家康によって淘汰される中であって、如何にして生き延びられたか、そこには、高政の誠実さからくる人柄に、家康も憎めなかった、あの戦国時代の封建社会でも、現在の人道主義は存在していたということを立証したかった。と同時に、佐伯の町はどうして造られたかという記録を残しておきたかった。

こんなテーマをもって一気に書き上げたが、宗麟の場合は、さきにテーマがあったわけではない。目的がなくて書くというのも変な話だが、その目的が見つからなかったのが動機になった。こうである。

毛利藩は小藩であった。徳川期の大名は、その大小はあっても、徳川幕府と直結していた。しかし、中世の場合はどうであろう。榊牟礼城の佐伯氏が、時の幕府足利氏と直結していたとは言えない環境にあった。幕府は全国に守護職を置いて統治させていた。現在の県知事のような役職であるが、豊後の国では、大友氏が代々その役職を継いでいた。しかも、幕府の権力が失墜してくると、各国の実権は守護職が握るようになっていた。そのため、佐伯氏は大友氏の支配下に置かれ、佐伯氏の政策は、大友氏の動向によって左右されていた。そして戦国期の大友守護職が宗麟であった。もともと豊後の国の中世史は、大友氏の歴史につきるが、特に戦国期にあっては、宗麟の存在が大きかった。それ故に佐伯氏の研究は、先ず宗麟を知ることから始めねばならなかった。

ところが戦国大名にあって、宗麟ほど評価がまちまちで、実像のとらえ難い人物はいない。例えば若い頃の宗

麟は、わがままな上に自己中心的で、どうにもならない若者であった。元来蒲柳の質で疝癪持ちのところがあるかと思えば、女ぐせが悪く家臣の女房まで寝取る始末であった。武將としては、高城・耳川の合戦で、島津に大敗を喫し、大友崩壊の原因を作った落第者であるともまで酷評される。しかもその素因がキリスト教入信によるとされるが、一方では、この入信は貿易や武器弾薬を得るための假の姿で、あくまでも仏門に帰依した仏教徒であったとする説も強い。

こうしてみると、実にその実像が把握し難く、キリシタン大名としてのこの時代の存在について半信半疑となり、ひいては佐伯氏の研究も挫折せざるを得なかった。そして煩悶の日々が続いたが、佐伯の中世を知るためにも、この問題から逃げるわけにはいかなかった。この時考えついた事が、宗麟を書かせる動機となったのである。いろいろな評価はあるが、野史や多くの評伝に迷わされるよりは、自らの力で宗麟の一生を追い、キリシタン大名が何であるか何であったか、自分なりの結論を見出せばよいのではないかと、執筆を一念発起したというわけである。

宗麟の評伝を確かめるためにも、宗麟の経歴を少し追ってみたい。

宗麟は幼くして母親と死別し、幼年期から愛情に飢えた生育過程を余儀なくされ、同情を集めて過保護に育てられた。元来豊後の国は、大友氏が移住以来、他国の侵入を受けたことがなかった。そんなのんびりした環境が宗麟のわがままをますます助長させた。今年大河ドラマで脚光を浴びる毛利元就が、宗麟を評して、「坊ちゃん大名」と評したのは、言い得て妙である。

そんな宗麟も青年期を迎え、一大転機の事件に遭遇する。この事件が大友史上著明な「二階崩れの変」である。この変は、一口に言えば大友の家督争いである。宗麟の乱行を見かねた一派が義弟の塩市丸を擁立しようとしたが、筋の通らない道理を嫌う宗麟は、大友館の二階でこの塩市丸を斬殺する。ただし、この時塩市丸をかばう父親義鑑にも刃をかけ、生涯心の傷を負うことになる。この心の傷は癒しようもなかったが、こんな時に、イエスズ会の創治者であるザビエルに会い、家庭的な愛情に恵まれなかった宗麟にとって、父性愛にも似た人間愛を感じる。

家督を継いだ宗麟は、若者にあり勝ちな短兵急に実権を掌握しようとし、意にそわぬ叔父の菊池義武を謀殺する。義武はこの時肥後を預かっていた。父親殺し叔父殺しの非情に対して、家臣団の中にも動揺が見られるようになる。この悪評に腹いせのように女に手をかけるが、家臣の女房まで寝取る始末に至っては、不穏な動きまで発展し、もともと腺病質タイプの宗麟は、精神分裂症気味となり、宿老加判衆達は、病状を心配して、臼杵の丹生島に転地療養させる。この丹生島が宗麟ののちの築城の発想につながってくる。

この頃、宗麟の弟晴英は陶氏の要請によって、大内に養子入りする。宗麟は陶氏の野望を見越して止めたが、晴英は宗麟の恐ろしさを知るとともに武士の意地にかけた。宗麟の治世方針は制圧的などころがある。もともと豊後の国は、大友入部以前に豊後生えぬきの大神一族の勢力があり、その抗争は長く続き、近くは佐伯惟治の乱があり、小原鑑元台頭の噂が上がると、宗麟は直ちにこれを制圧し、佐伯惟教は四国に亡命する。宗麟のこの制圧的な方針は気性からくるものであるが、大友の繁栄はその結束した家臣団に負うところが大きい。こうして宗麟

は九州六か国を支配し、黄金期を迎える。

しかし、治世が落ち着けば落ち着く程、癒されないのは心の傷である。宗麟はこの傷を癒そうとして仏門に帰依する。禅にこる「宗麟」の法名はこの時からで、大友の通名は義鎮である。

宗麟の全盛期も、中国毛利氏の台頭によって、雲行きが怪しくなってくる。大内を継いだ晴英も元就によって謀殺され、宗麟は本格的に丹生島に築城を考える。

宗麟はザビエルに感銘を受けてから、領内のキリスト教の布教を許していたが、大内の滅亡によって、イエスズ会は山口にあった本拠地を豊後府内に移した。この頃の宗麟はキリスト教の教義に関心をもちながら、ポルトガルとの交易による経済面や、武器・弾薬の譲渡を優先したといっても過言ではない。

丹生島城の築城も、その要塞化に適した地形もさることながら、大分川河口にない、大船の横付け出来る良港の開発を考え、臼杵を発進して、東支那海に雄飛する構想を考えていた。現在における海洋都市構想である。現在佐伯市も、海洋文化都市構想をかかげて、市の発展を計画しているが、宗麟は四百年前に、すでにこの構想を

実行に移した先駆者である。ただしこの計画が挫折したのは、宗麟が入信しなかったからである。当時の日本布教長であったトルレス神父は、宗麟の入信に見切りをつけ、本拠地を肥前に移した。長崎を開港したのは、それから数年後のことである。

間もなく、大内領を席卷した毛利は、異国との経済拠点を確保せんとし、博多の奪回を企て、大友との一大決戦となる。宗麟は元就に乾坤一擲の大勝負を挑み、毛利勢を九州から駆逐する。この合戦こそ宗麟のもっとも華やかな戦記である。

外敵を駆逐し九州探題の地位を確保した宗麟は、内政に目を向け、子供達の家庭環境を整えようとするが、次男親家には頭を痛め、思考の時間をもてる程、内在する心の傷が浮かび上がってきた。宗麟は「二階崩れ」の撤をふまぬため、親家のために慈林寺を建立し、嫡子義統から切り離そうとするが、武將を夢見る親家は、僧侶を嫌い、死を選ぶかキリシタンになると言う。身内のことが思うに任せぬまま、親殺し叔父殺し、ひいては弟晴英まで見殺しにした悪評が、頭のどこかにこびりついて拭出来ないでいた。

大友のために合戦に明け暮れ、外敵は一段落しても、宗麟の心は一向に晴れなかった。わが身を振り返って、何をしてきたか、何をすべきかを考える時、自分というものを置き換えて、人間とは一体何だろうかと悩み続けるようになった。宗麟の意にそわぬ親家は、京から招いた高名な禅師の高説よりも、捨て子を拾ってきたては養育する、キリスト教布教師達の行動に感銘し、キリスト教に興味を覚える。そこには、純心な若者たちを引きつけるキリスト教の教義があった。生まれてくる子が職業や環境を選べるわけもなく、神の子として皆平等である。

そして神から授かった恩恵は世の中に返さなければならぬ。こう説くキリスト教の愛は、人間を考える宗麟にとって、これこそ人間の道の本筋ではないかと思うようになった。この神の子としての平等性が、宗麟に人間は個人、個人で成り立っていることを案示した。そして個人としての自分とは考えさせられる時、幸にも三前三後の領主であった。何をなすべきか。この時宗麟は、始めて人間への自覚に回帰する。

人間に目覚めた宗麟は、イエズス会から学ぶことが多かった。捨て子を拾ってくるアルメイダ修道士は養育院

を造り、病で苦しむ病人のために病院を造り、人手が足りなくなると、学校を建て医師や修道士の人材を養成する。これらは当時のポルトガル国の布教による国勢拡張には違いないが、宗麟はこの組織力に目を見張り、進んだヨーロッパ社会を透視した。ここが宗麟の非凡なところである。

同じ人間として生まれながらも、合戦に明け暮れるこの日本よりは、進んだヨーロッパの国に住む方が、より幸せに違いないと考えた時、宗麟はそんな国を造ってみたくなった。

病院や学校を整備し、個人の意思に従って才能を延ばし、安心して働ける国、そんな国が出来れば、領民達はさぞ喜ぶであろう。これこそ自分がやらねばならない仕事と、宗麟はこの実験国家の創立に向けて生きがいを感じるようになった。

そしてこの生きがいを実現させるため、準備期間に移る。キリスト教の息がかかれは、八幡の神を信奉する家臣団は猛反発するに違いない。そのため、宗麟は家督を義統に譲り、大友の身を離れて計画を練った。この頃、幸か不幸か、日向の伊東氏は島津に追われて大友を頼り、

日向の失地回復を宗麟に要請していた。宗麟はこの日向に眼をつけ、島津を追い出し、伊東氏の顔を立てると同時に、キリスト教的理想国家の成立を夢見て、入信してこの計画を実行に移した。ところが、この経過が因となって、大友の崩壊につながる。高城・耳川の大敗北となる。

宗麟の評伝は、この結果から武將として落第者の極印を押すが、宗麟のため少し弁解しておきたい。この時宗麟はすでに武將ではない。一介の老人キリシタンとして神に仕える身である。敗北の因は義統に大友を統率する器量がなかったことにつきる。家臣団は作戦通りに動かさなかった。宗麟はこんな事もあるうかと、義統に権力を集中させ、長年準備期間を置いたが徒勞に帰した。それ程、大友における宗麟の存在が大きかったわけであるが、宗麟の行動にも納得出来ないところがあった。宗麟はキリシタン武士団を率い、延岡まで出陣したが、その格好は十字架を首から下げ、キリスト教の幟を立て、異様な光景であった。第一線で戦うのならいざ知らず、この光景を見た武士団は、なぜこのキリシタンたちのために、血を流さねばならないかと、戦意がなかったのも無理ではない。又島津の勢力を過少評価した欠点もある。

こうして以後、豊後は島津軍に蹂躪され、秀吉に頼ることになる。ただし佐伯勢は、堅田の合戦で島津勢を破り、梅牟礼城は健在であった。ここらは本文を読んでもらいたい。

島津の野心も、秀吉の遠征によって決着をみるが、理想国家建国の夢破れ、ささやかな桃源境を、隠棲地の津久見にかけて夢をつないでいた宗麟も、熱病に犯され、五十八歳の生涯を閉じた。天正十五年（一五八七）五月のことである。

入信後の宗麟については、イエズズ会が本国へ連絡する報告や、宗麟の最期を看取ったラグナー神父の日記によって詳述されている。これらの経緯をみる限り、宗麟の入信が假の姿であるとはとり得なかった。宗麟は幾多の精神遍歴から超越し、神の道を信じ、自らの生きがいに進進したと思われる。

このキリスト教も、宗麟の死後一か月にして、秀吉は禁止令を出してキリスト教を排出する。秀吉は、布教を手段とするポルトガルの国策に危険を感じたが、当時の天下人としては、当然の処置であったかもしれない。

では、当時のキリシタン大名に、如何なる意義があっ

たのではあろうか。僅かの期間に突出し、やがて歴史上から抹殺される運命だったとしか言いようがないが、一つには、あの戦国期に、仏教以外に、キリスト教という新しい宗教が日本に入ってきた。そしてその教義から人間の在り方について、目覚めさせられたということである。むなしい国盗り合戦や封建制度の中に、人間としての矛盾を感じ、改革しようとした形がキリシタン大名とすれば、キリシタン大名こそ真の勇者であったかもしれない。

こうして宗麟の一代記を書き終えてみると、その人物評や評伝について、当たっているところもあれば、当たっていないところもあった。そして筆者が小学生の頃、「昔大友宗麟が残せし文化花と咲き——」と宗麟讃歌を歌った記憶があるが、現在、物理的に宗麟の残した遺産を眼にすることは少ない。しかし、一口にキリシタン大名というその中に、人間の在り方、人間の原点について、示唆に富むことを認識させられた。宗麟はキリスト教により、神の力を借りて、領民一人一人の幸せを考えるようになった。そこにあるものは、個人個人の個を基調と

する考え方であった。その当時、人権という言葉はなかったかもしれないが、現在の基本的な人権に通じる考え方である。こう考えると、四百年前、宗麟こそわが国における。個を基調とする思考の先駆者ではないかと思うに至った。これこそ宗麟の残した最大の遺産であろう。これが四巻を書き終えて得た私の結論である。

こうした宗麟の遺産を少し考えてみる。大友は秀吉によって除国されるが、アルメイダ病院やイエズズ会にならって創設したコレジオ（学校）等は、その系統が引き継がれた。その上、宗麟がイエズズ会からヨーロッパを透視する、卓越した国際感覚は、豊後が長崎に近いこともあって、洋学とともに、学問的な交流が導入され、徳川期にあって、独自の豊後儒学が形成された。豊後の三傑然り、そしてその伝統を受け継いだところに、明治維新の福沢諭吉が表われる。福沢が説く、「一身の独立なくして、一国の独立なし」、この薩長の明治政府に反発して、民権運動を呼び起こす思想こそ、宗麟の個を基調とする思考の結実したものと思われてならない。この民権運動には、福沢の高弟である矢野龍溪や藤田鳴鶴が、

日本で最初の政党を創立して活躍するが、大分県という土壌から生まれたこれらの経過は、偶発的なものとは思えない。やはり、宗麟の思考の遺産が、次第に根づいてきた結果だと思われてならない。



蒲江神楽から

これは葛原岩戸神楽のうち、布晒ぬまひと言い、天八千々姫命が神衣を織ってよく洗い、よく濯ぐ様子を水神が道化役で現われて、命の真似をする神楽という。